私がなぜ現在の科目を選んだか

「病理学」

信州大学医学部附属病院臨床検査部
遠　藤　真　紀

私は現在臨床検査部で，病理組織診断に携わりつつ，勉強させていただいています。

医学部学生のころは，何科に進むか決めていなかったため，“病理学→試験前に組織像を慌ててスケッチ”，“臨床検査部→R-CPCと格闘”くらいの記憶しか残っていません（先生方大変申し訳ありません…）。

初期研修開始時には内科に進もうと考え，実家の近くの病院で内科中心のローテートプログラムで研修を始めました。さまざまな科で病棟研修をする中で，病理診断の重要性を徐々に感じるようになりました。1年目の研修中には常勤の病理の先生がいらっしゃったので，指導医とともに直に所見について質問に行ったり，学会発表時にコメントをいただいたりする中で，“病理組織診断”に対する興味が深まっていきました。また，各科を研修している中で，“実際に目に見えたものに従って診断する”ことに興味を感じました。

研修2年目の進路決定時，臨床への若干の未練を残しつつ病理診断を勉強できる環境を探して見学に来た際，臨床検査部内で病理診断に携わっている先生方を見て，こちらで病理を勉強してみたい，と思いました。

とはいえ，初期研修中にCPCレポート以外に全く病理の研修をしていない状況での入局でしたので，今振り返って考えると結構無謀だったな，と思うと同時に，快く入局を許可していただいた先生方に改めて感謝したい気持ちです。

実際に病理医（修行中）として働き始めてみて，組織所見の他に癌であれば各種取扱規約の記載やTNM分類，各種の免疫染色など，勉強するべき内容が多岐にわたっており，自分の頭の悪さに今更ながらうんざりする日々ですが，毎日顕微鏡と楽しく時に苦しく（?）格闘しています。また，病理組織診断にかかわる病理医の人数が全国的に不足しているということは入局して初めて知りました。遠い将来のいつか，私も病理の魅力を後輩に伝えることのできるような病理医になれたらいいなぁ，と思って今後とも精進していきたいと思っています。

（信大平18年卒）

私がなぜ現在の科目を選んだか

「産婦人科」

信州大学医学部産科婦人科学講座
浅　香　亮　一

他科の先生方も同じだと思うのですが，もともと医学部入学時は産婦人科医になろうとは微塵も考えておりませんでした。はじめは救急医療や災害医療に従事したいと思っていました。もともと医師を目指したのも，阪神淡路大震災で日本の文明社会がいとも簡単に崩壊するのを見て，秩序が崩壊したときに役に立つことがしたいと思ったのがきっかけでした。その当時の私のやる気は今振り返っても感心するぐらいで，エネルギーに満ち溢れていました。しかし医学部に入学し，大学生活のぬるま湯にどっぷりと浸かった私からは徐々にそのエネルギーが失われていったのです。

医学部も6年生になりポリクリもなんとなくこなしていた私が，出会ったのが産婦人科でした。まず，ポリクリの講義で尋常ではない情熱をぶつけてくる先生に出会いました。病棟では叫び声とともに，児娩出。「おぎゃあ」やら「ぎゃあ」やら「おめでとう」やらダイナミックな人生の始まりのシーンが展開され，婦人科病棟では静かに終末期の患者さんの話に耳を傾ける。病棟は雑然とし，医師，看護師，助産師，妊婦，患者，家族が交錯し，混沌の中に確実に何かが生み出され，消えていく。エネルギーの貯蔵量がほぼ底を尽きていた私の魂は激しく揺さぶられ，一気に充填されました。気がついたら「産婦人科に入ります！」と挙手し，胴上げされ宙に舞っていました。

結局，産婦人科を選んだのは魂を揺さぶられ，その後は勢いでした。しかし，現在の制度では入局を決めるのは，卒後研修2年間を終えてからであります。この後，再び産婦人科でよいのかという葛藤に2年間悩まされることになりました。研修でも産婦人科を選択することになったのですが，学生の身分と医師とではやはり，感じるものが違いました。常位胎盤早期剥離にて緊急帝王切開決定，1秒でも早く手術に行かなければならない場面。医師も研修医も看護師も助産師も，はたまた学生も，手伝えることはいくらでもあります。

全員で一丸になって手術室に直行，母児ともに無事！アドレナリンが体中を駆け巡った後の心地よい疲労感となんともいえない達成感はこのとき体験し，やめられない中毒症状のように今も続いています。

結論としては，産婦人科に入ってよかったと思います。診療科の魅力のみならず，信州大学産婦人科の医局の雰囲気も大きな要素です。いくら興味があっても同僚や上司との関係がうまくいかないとなかなかうまくいきません。体力的にきついなどと噂されていますが，それはどの科でも同じで，がんばりたい気持ちになるかどうかは職場の雰囲気も大切ではないでしょうか。

最後に，男性が産婦人科医になることには世間や患者さんからの風当たりが強い実情があります。しかし，誠実に診療を続けていれば患者さんも必ず理解，応援してくださいます。女性への気配り，思いやりにあふれた紳士であるべく，これからも精進を重ねたいと思います。

（信大平19年卒）